

『古今集延五記』の表記について

——ハ行転呼を中心に——

田 辺 佳 代

堯惠自筆本『古今和歌集聞書』、一名『延五記』は天理図書館に所蔵されている。この『延五記』の名称は、延喜五年古今集撰集からとったものと言われ、『古今集延五記』の外題を持つ版本が、宮内庁書陵部にある。

原本には外題がなく、紫地絹表紙にそれぞれ異なった金泥の図柄を持つ二十三冊から成っている。そして、この第一冊の内題には「古今集序中声句相伝聞書」とあり、奥書には「第一ノ帖 延徳四年壬子十月廿六日 和泉守藤原憲輔ニ当流二条家令授之聞書 十二卷之中一部之序 初巻也 法印堯惠(花押)」と記されており、延徳四年(一四九二年、この年の七月十九日にすでに明応と改元されている。)十月二十六日、法印堯惠が、藤原憲輔に二条家の古今伝授を施した自筆本であると認められる。

『延五記』の内容は、古今集全巻にわたる注釈で、「声句相伝」とあるように、古今集のアクセントや清濁など発音に関する注が多く見られるのが特徴である。

『延五記』の声点の付された部分については、すでに、秋永一枝氏の『古今和歌集声点本の研究』(資料篇・索引篇)で扱われており、他の古今集諸本、諸注釈書との比較や検索も行なえる。

堯惠については、井上宗雄氏の研究に詳しいが、二条家の流れをくむ常光院流堯孝の高弟で、法印僧都、藤の坊と称し、歌僧として文明期以後、明応末に至るまで著名であったという。また、同氏によると、

常光院流の人々は僧位僧官を持っていたから、昇殿して古典を講説などしてその權威は誇示したが、その扱う書物が古今集・伊勢物語・詠歌大概・百人一首・藤川百首・井蛙抄・愚問賢注程度の狭さであり、しかも声句を得意とするが如きアカデミックな傾向があり、特に宗祇一派に比して大衆性に乏しかった様だ。(中略)なお大衆性・啓蒙性に乏しいとはいっても、頼阿・堯孝の説、古今集などを京や地方の武士達・連歌師に伝えた功績は没すべからざるものがある。

ということとその權威と活躍がうかがえる。冷泉派の連歌師、猪苗代兼載も、歌学は堯恵に学びこれを兼純に相伝したものが、『古今私秘聞³⁾』である。

このように『延五記』は、成立の事情、背景もかなり明らかであり、古今集全巻にわたる注釈をしており、量も二十三冊に及び、用例・問題点も豊富である。さらに、古今集の引用部分にはひらがなを用い、歌の注釈部分では、漢字カタカナまじりで書いているので、両表記の相違の点からも問題が検討でき、当時の音韻・表記を考える上で、大変興味深い資料といえる。

一 歌部分における表記

歌部分について、ハ行転呼に関する異表記をとりあげる。これは、歴史的仮名遣と比較したもので、以下誤用とするのも同じである。また、いわゆる定家仮名遣と比較するために、定家『下官集』、行阿『仮名文字遣』、一条兼良『仮名遣近道』（いずれも国語学大系九所収）を参照し、これらに見られる表記については、語の上にそれぞれ「下、カ、チ」の符号を付した。

配列については、五十音順を基本としたが、同じ語や同じ活用形はまとめるようにした。また、語の意味を明確にするため「」内に漢字を示し、活用語の活用形は、未然形（未）、連用形（用）のように略号で示した。なお必要に応じて文節の形で示してある。

表出箇所を示す十—5—2・431とあるのは、『延五記』翻刻本の巻十・5 ページ2行目、歌番号431を示している。仮・真・別は、

それぞれ仮名序・真名序・別伝の意味である。また題、詞書、左注は、その属する歌番号をあてている。用例数は算用数字で示し、その語の正表記も見られたものは、その下に横線で区切ってその数を示した。歌部分のハ行のかなに関する異表記は、表Ⅰ（次ページ）の通りである。

これによって次のことが判明した。

一、助詞の「は」「へ」「を」においては、誤用はない。

二、ハ行動詞の活用語尾に誤用はない。例外として、「おい〔老〕を」「おひ」と表記するものが、正表記3例に対して1例見られたが、これは、定家『下官集』にも、「おひあぬれはおいぬれは又常事也」とあるものである。

三、ヤ行・ワ行動詞をハ行に表記したものに「植へ」「据へ」などがあり、混用することなく、すべて「へ」の表記をとっている。この表記は、定家仮名遣に普通に見られる用法である。

四、他に、異表記で定家仮名遣に見られるものでは、「あは〔泡〕・かくなは・くひ〔悔〕・つめに・そへに・ゆへ・ゆくゑ・とをし〔遠〕・まとを」の語例が見られた。これらの表出数は少ないが、正表記と混用していない。これは古今集筆写の際、定家仮名遣が守られたものと思われる。

五、ハ行のかなをワ（ア）行にした異表記の例は、すべて見られたが、ワ行のかなをハ行とした異表記については、「あを」「ひ」「う」を「ふ」、「を」を「ほ」とするものはあらわなかった。また「お」を「は」とするものも見られない。

表Ⅰ
歌部分の異表記一覧

へ↑あ		う↑ふ		ふ↑う		い↑ひ		ゐ↑ひ				ひ↑い		ひ↑ゐ		わ↑は				は↑わ		語	数 用 例	表 出 箇 所			
カウヘ(末)		万えうしう				おほい		下カチ つゐに「終」		カクひ むくひ		下おひ カクひ		なわたき(縄たき)		カあは		カかくなはに さはき さはく たはゝに よはし		泡							
〔植〕						〔覆〕		〔終〕		〔報〕		〔悔〕		〔老〕													
5		1				1		3		2		1		1		1		2		1		4					
一 — 20 — 3 — 34		仮 — 33 — 3		なし		二 十 — 29 — 9 — 1099		六 — 13 — 22 — 9 — 793		十 九 — 37 — 11 — 1042		十 六 — 77 — 8 — 1041		十 七 — 21 — 11 — 837		なし		十 八 — 10 — 7 — 961		十 五 — 28 — 13 — 809		十 一 — 41 — 12 — 533		十 五 — 22 — 5 — 431			

[illegible]

二 注の部分における表記

注の部分の異表記について、歌部分と同様以下に取りあげる。
なお、助詞の「ハ」「ヘ」「ヲ」においては誤用は特になかった。⁽⁵⁾
他の一般の用語については次の通りである。

○ハ・ワの問題（表Ⅱの1参照）

表Ⅱの1 注の部分の異表記 — ハ・ワ —

語	用例		表出箇所
	数	用正	
アハ	5	二—10—13 十二—14—1 十三—25—8 十五—22—6 二十—37—13 八—21—13 八—22—2 十四—27—6	[泡]
カハク	3	別—1—6・10 別—2—6 仮—6—10 一—23—9 五—7—9 十四—4—10 十六—19—3 二十—25—4 二—11—3・5・8・13	
コトハリ	9	別—1—6・10 別—2—6 仮—6—10 一—23—9 五—7—9 十四—4—10 十六—19—3 二十—25—4 二—11—3・5・8・13	[乾]
サハカシ	8	二—11—3・5・8・13	

語	用例		表出箇所
	数	用正	
イツワリ	4	六—7—6 十二—29—14 十四—9—7・10 仮—5—4 三—4—6 十一—30—1 十一—49—3 十四—30—6 十四—6—7 十八—11—5 十七—25—13 十九—28—9 十五—14—6 十九—42—3 二—8—13 十七—31—12 十七—6—12	[偽]
サハク	2	二—13—1 二—14—4 十八—5—3 十一—41—14 十八—45—4 十三—20—9 九—14—11 一—30—3・20 十五—11—1 十七—20—8 十七—21—4	
ヨハシ	1	九—14—11 一—30—3・20 十五—11—1 十七—20—8 十七—21—4	[水泡]
ヨハル	6	九—14—11 一—30—3・20 十五—11—1 十七—20—8 十七—21—4	
枇	1	十九—28—9 十五—14—6 十九—42—3 二—8—13 十七—31—12 十七—6—12	[廻]
マワス	2	十九—28—9 十五—14—6 十九—42—3 二—8—13 十七—31—12 十七—6—12	
マワス	1	十九—28—9 十五—14—6 十九—42—3 二—8—13 十七—31—12 十七—6—12	[舞]
マワス	1	十九—28—9 十五—14—6 十九—42—3 二—8—13 十七—31—12 十七—6—12	

一、ハ行活用語の活用語尾には誤用がない。

二、ハとあるべきをワと表記したものは、35例と多く、イツワリ・クワシク・ナワタキ・マワスなどでは、ハとワの両表記を混用している。

三、これに対して、ワとあるべきものをハと表記したものは、ワの表記と混用することなく語によりまとまっており、表出数も多くなっている。

これを、歌部分の表記の状態と比較してみると、注の部分では、ハをワと表記した語例が多くなっており、また歌部分・注の部分ともに、ワをハと表記したものに、「アハ」〔泡〕・サハク〔騒〕ヨハシ〔弱〕の語例があった。

馬淵和夫氏は、『平安かなづかい』について⁽⁶⁾で、「サハギ・カハキ」(打聞集)「コトハリ・シハサ」(法華修法一百座聞書)「ラハタ・サハガシ」(前田家本色葉字類抄)などの誤用を指摘されている。そして、これらの資料において、格助詞「ハ」やハ行動詞活用語尾が「ハ」と表記されており、文節中の「ハ」はほとんどすべて正しいことから、「コトハリ・シハサ」の誤用の例も含めて、『文節中の「ワ」の音は、「ハ」と書くべきであるという意識が存在した。』ことによる「かなづかい」であると説明されている。

『延五記』注の部分においても、助詞「ハ」、ハ行動詞の活用語尾や、「アハレ」59例・アラハ43例・カハル50例などで正しく「ハ」の表記がとられており、語中ハの正表記総数は、526例にのぼる。また、ワとあるべきものをハと表記した異表記例も、「アハ・カハク・コトハリ・サハク・ヨハシ・ヨハル」などの語に35例出てい

る。これに対して、ハとあるべきものをワとしたものは、19例にすぎないので、語中の「ワ」の音の96.6%は「ハ」と表記されていることになる。

また、『延五記』卷十三(御番(十三—25—8—11))には

……次ニアハト見ナカラト云心有歟 其モカハトアハト同カ
ナノヒ、キニ取事有 其モタカヒ侍ラネトモ其ヲハキラヒ侍
リ……

とあり、これによれば、ハ行転呼した「河」のワと、もともとワと発音した「泡」^カとが、「同シカナノヒ、キ」として、語中のワの音を同音に意識していたことが認められる。

一方、語中のワの音を「ワ」と表記しているものは、「語中のワをハと表記する」意識よりも、発音通りの表記の表われたものと考えられる。そのため、誤表記の語例にまとまりがなく、表出数も少ないものと思われる。

また、「ワ」の表記で正表記のものには、シワサ2例・サワル1例・カタワレ2例・カヨワキ1例・コトワサ1例・セワ1例、などがある。このうち、シワザ・コトワザ・カタワレ・セワは複合語で、語構成からもワと意識できるもので、誤用が表われないのはむしろ当然といえる。

以上のように、「ハ」とあるべきを「ワ」と表記した誤表記の例とも考え合わせると、馬淵和夫氏の指摘にあるように、語中に「ワ」の表記があらわれるものは、語幹中に「ワ」の音をもつものか、または体言であることが認められる。

これらをまとめると、同氏の言われる「語末(活用語尾もふく

[illegible]

十七	十一	五	十四	十九	十八	別	十六	十七
24	10	17	10	19	31	46	5	10
3	1	4	7	2	14	7	11	14
			9					
			11					

の異表記例がある。

「ツキニ」の表記は、歌部分にも3例あり、定家仮名遣にも見られる語であるが、「イ」を「キ」と誤用する例と考え合わせ、^⑧「ツキ」の語音の共通性も注目される。

四、「イ」を「ヒ」としたものは、「クヒ」^⑨「梅」^⑩「ムクヒ」^⑪「報」^⑫が、歌部分と共通して出ており、定家仮名遣にもあるものなので、これによるものと思われる。

また、「或」^⑬の例や、イ音便を「ヒ」と表記した「動」^⑭の例が見られた。

五、「キ」を「ヒ」とするものは、わずかであるが出ている。すでに「イ・キ」は同音になっていたため、「イ」と同様に意識されて「ヒ」と表記されたものであろう。

これらの表記の状態から、「ヒ・イ・キ」についても「ハ」の場合と同様、語中尾の「イ」の音を「ヒ」と表記する傾向があったと考えられる。「ヒ」の正表記のものは、タトヒ8例・タカヒニ5例など265例あり、これに対して、「ヒ」を「イ」と表記したものは、16例で、漢字の振り仮名や、名詞形のものが多く、表音的な表記をとったものと思われる。

たとえば、「幣」^⑮においては、「幣」^⑯（十九—18—10）のような活用語尾では「ハ」と正しく表記されているが、その名詞形では「イ」と表記されている。同様に「祝」の場合も、動詞「祝フ」の活用語尾では5例とも正しく表記されている。

山内育男氏は、親鸞のかなの用法においても、「ハカライ・ツカイ・キライ」など、ハ行動詞連用形の名詞相当の場合、古用の「ヒ」を「イ」とする傾向が顕著であると指摘されている。

全般的に、『延五記』における「ヒ・イ・キ」の表記については、活用語の活用形などの語中の「イ」の音は、「イ・キ」ともに、「ヒ」と表記する傾向が認められ、これに対して、動詞連用形の名詞相当語や、漢字の振り仮名では、表音的な表記をとって「イ」と表記している。また、語によって個別的に「キ」の表記をとるものも見られる。

○フ・ウの問題（表Ⅱの3参照）

一、ハ行活用語の活用語尾は、ほとんど「フ」の表記が守られている。（玉フ（終）17例・（体）22例など） また、語中フの記正表例は、298例で、これに対して「ウ」と異表記した例は、漢字の振り仮名部分などに9例見られた。

（長音アフ・オフ・エフ・イフの漢字音については、上臈十七—10—1・農業三—10—12など、ウと表記するものがほとんどである。）

二、「藏人・唯人・養妹」のように、「ひと」の音便形である「ウ」の仮名を「フ」と表記したものが見られた。

三、動詞では、ヤ行・ワ行下二段動詞の活用語尾を「フ」と表記した「ウフル（植）・聞フ・栄フ」が見られた。

湯沢幸吉郎氏の『室町時代言語の研究』によれば、ア・ハ・ワ行の下二動詞の連体形がヤ行の動詞のように用いられ、「タクワユル事韻」「ヲフミカユルソ」（ハ行の例）（史記抄）、「桃花李花ヲユル也」（ワ行の例）、「コ、ロユル也」（ア行の例）（中華若木詩抄）などの例が多い。『延五記』でも、「取カユル」（十七—41—11）の

例が見られた。

表Ⅱの3 注の部分の異表記 —フ・ウ・ユー—

語	用例		表出箇所
	数	用正	
フーウ	1	1	十六—12—7
唯人 ^フ	1	1	八—20—8
養妹 ^フ	1	1	九—8—6
ウフル(体)〔植〕	2		五—19—4 十五—9—5 十七—11—9
用フ	1		真—9—9 真—6—2
聞フ(終)	1		十九—45—11
栄フ(終)	1		十二—16—8・12
サカフル(体)〔栄〕	5		十三—7—3 十九—27—9 二十—24—5
用ユ			二十—30—2 十四—27—4 別—9—6 三—23—12 八—1—7 別—44—10 十七—11—1
ウーフ	1	(2)	二—41—7
生浦	1	(1)	
追	1		
易	1		
カタラウ(体)	1	(10)	
昨日	1		
添ノ上ノ郡	2	2	
タウトシ	1		
具	1	(7)	

ユーフ	ユウツケ鳥
取カユル	
1	1—2 十三—13—2 十七—41—11

また、前掲書でヤ行下二動詞の連体形をア行またはハ行に表記する例が、「コウルコトアランヤ」「サカウルナリ」(ア行の例)(論語抄)、「栄フベキゾ」(中華若木詩抄)「聞フル者トテハ」(四河入海)(ハ行の例)、などのように見られる。

『延五記』においても、このような、アハヤワ行下二動詞の混乱から「聞フ」「栄フ」「サカフル」のように、ヤ行下二段の活用語尾「ウ」を「フ」と表記したものと考えられる。

また、ワ行上一・上二動詞「用ウ」では、「用ユ」というようにヤ行の語尾をもつものが5例(十二—16—8・12など)見られる一方、「用フ」のように「フ」と表記した例が1例見られ、混用の状態がうかがわれる。

他に、ハ行動詞のウ音便を「フ」と表記した「アフテ」(五—18—13)や、「ホ」とあるべきを「フ」とした「ト、コフル」(十四—18—11・14)の例が見られた。

これらのことから、全般的に、語中の「ウ」を「フ」と表記する傾向が認められ、これに対して、漢字の振り仮名や長音では、「ウ」と表記するものが見られる。

表Ⅱの4 注の部分の異表記―へ・エ・エ―

	へ↑エ	語
植 ² . ホリウヘシ〔堀植〕 ウヘテ スヘ人	(用)	ウヘ(未) 〔植〕
6 2 1 1 1	11	9
<hr/>		
21		
<hr/>		
八 8 2	三 23 14	仮 12 11
別 45 7	別 45 6	二 19 3
十九 19 6	十五 13 4	十一 12 14
五 14 4	四 37 12	二 36 12
十八 28 11	五 18 2	五 12 7
五 11 9	四 49 4	一 20 10
(2例) (2例)		
13 11		
<hr/>		
表出箇所		

<p>エ↑ エ↑ エ↑</p>	<p>↑ エ</p>	<p>ユクエ 紫ノウエ コタエ(未) サエツル タトエ(用) ヲトロエ(用)</p>	<p>聞へ(用)</p>	<p>サカへ(用)</p>	<p>タへ(未) 見へ(未) (用)</p>	<p>エ↑ エ↑ エ↑</p>
<p>〔行方〕</p>	<p>〔絶〕</p>	<p>〔答〕 〔轉〕</p>	<p>〔采〕</p>	<p>〔采〕</p>	<p>〔絶〕</p>	<p>エ↑ エ↑ エ↑</p>
<p>2 1 1 1 1</p>	<p>4 1 1</p>	<p>2 1 1 1 1</p>	<p>4 3</p>	<p>4 3</p>	<p>4 1 1</p>	<p>エ↑ エ↑ エ↑</p>
<p>5 36 4 1</p>	<p>11 5 8</p>	<p>5 36 4 1</p>	<p>0</p>	<p>0</p>	<p>11 5 8</p>	<p>エ↑ エ↑ エ↑</p>
<p>(8) (15)</p>	<p>(16) (16) (11)</p>	<p>(8) (15)</p>	<p>(4)</p>	<p>(4)</p>	<p>(16) (16) (11)</p>	<p>エ↑ エ↑ エ↑</p>
<p>十四 十一 九 一 十九 七 十四</p>	<p>七 四 二 一 四 別 十八 十七 二 四 二 十五 十五 十一</p>	<p>十四 十一 九 一 十九 七 十四</p>	<p>七 四 二 一 四 別 十八 十七 二 四 二 十五 十五 十一</p>	<p>七 四 二 一 四 別 十八 十七 二 四 二 十五 十五 十一</p>	<p>七 四 二 一 四 別 十八 十七 二 四 二 十五 十五 十一</p>	<p>エ↑ エ↑ エ↑</p>
<p>3 10 13 16 17 5 9</p>	<p>17 19 39 13 36 31 15 18 12 11 9 14 17 2 1 37</p>	<p>3 10 13 16 17 5 9</p>	<p>17 19 39 13 36 31 15 18 12 11 9 14 17 2 1 37</p>	<p>17 19 39 13 36 31 15 18 12 11 9 14 17 2 1 37</p>	<p>17 19 39 13 36 31 15 18 12 11 9 14 17 2 1 37</p>	<p>エ↑ エ↑ エ↑</p>
<p>5 10 13 16 17 5 9</p>	<p>17 19 39 13 36 31 15 18 12 11 9 14 17 2 1 37</p>	<p>5 10 13 16 17 5 9</p>	<p>17 19 39 13 36 31 15 18 12 11 9 14 17 2 1 37</p>	<p>17 19 39 13 36 31 15 18 12 11 9 14 17 2 1 37</p>	<p>17 19 39 13 36 31 15 18 12 11 9 14 17 2 1 37</p>	<p>エ↑ エ↑ エ↑</p>

一、ハ行活用語の活用語尾では、ほとんど、「ハ」の表記が守られている。(云ヘ〔己〕98例タトヘ〔己〕36例など) また、助詞をのぞいた一般用語での語中「ハ」の正表記は531例ある。

二、「エ」を「ヘ」と表記したものは、「ウヘ」「植」21例。「スヘ」「掘」6例のように、ワ行下二動詞の未然形・連用形のものが見られ、これらでは、すべて「ヘ」の表記で出ており、歌部分の表記にも見え、定家仮名遣に見られる用法である。

三、「エ」を「へ」と表記したものは、「聞へ3例」「見へ(未)4

「エ」と「エ」の表記では、「エ」と表記するものが少なく、ほとんど「エ」と表記されていたので、「エ」が「エ」に統合されていたことが認められる。このことから「エ」を「へ」と表記したものは、「エ」を「へ」と表記する用例にひかれて、語中「エ」の音は「へ」と表記する意識から、「へ」の表記をとったものと考えられる。

四、「へ」を「エ」としたものは、定家仮名遣や、歌部分にも見られる「ユクエ」1例がある。「エ」と「エ」の書きわけにおいても「エ」の表記は、「スエ〔末〕（十四—14—14）」で1例認められた以外は「エ」の表記をとっているので、「ユクエ」の表記は、語による個別的な異表記例と考えらる。

五、「へ」を「エ」と表記したもので、表出数も少なく、異表記例にもまとまりがない。

これらの表記の状態から、「へ」についても、全般的に、語中尾の「エ」の音は「へ」と表記する傾向があり、ヤ行下二動詞においても「エ」表記が守られず、ワ行下二動詞で「へ」と表記するのひかれて、「へ」と表記したものと思われる。これに対して、個別的に「ユクエ」の表記や、「へ」を「エ」とする表音的な表記

が出ていると考えられる。

○ホ・オ・ヲの問題（表Ⅱの5参照）

一、「ヲ」とあるべきを「ホ」と表記した例が見られた。これらは「ヲ」の表記では一例もなく、歌部分の表記には見られないものである。

二、「オ」を「ホ」としたもの、「ホ」を「オ」としたものは見られなかった。

三、「ホ」を「ヲ」と表記したものは、異表記例が多く、「ホ」の正表記と混用することなく見られる。また「トヲ」「ナヲ」の語音を持つものが注目される。

四、「オ」と「ヲ」の使いわけについては、定家仮名遣では、平声に「オ」、上声に「ヲ」の仮名をあてて、アクセント仮名遣によるのと、『延五記』の歌部分の表記では、鎌倉期のアクセントが反映されており、注の部分の表記では、室町期のアクセントが反映されていることが認められた。

「ホ」を「ヲ」と表記した語について、そのアクセントを調べてみると、「ナヲ」^{平上}（鎌倉・四座講式、室町・補忘記）^{（U）}「猶」^{平上平}（鎌倉・四座講式、室町・補忘記 開合名目抄）では、「ヲ」が上声のアクセントに合致しているが、「トヲス」^{ナツシ}「ナラス」では、「ヲ」の音節が平声で合致していない。（トヲス^{鎌倉}・室町^{○○●●○○○}・ナラス^{鎌倉}・室町^{○○●●○○○}）

このように、「オ」と「ヲ」の表記については、アクセント

注の部分の異表記

[illegible][illegible]

による使いわけが認められたのに対して、「ホ」とあるべきものを「ヲ」と表記したものについては、特にアクセントにはかかわらないようである。

八、馬淵和夫氏の前掲の論文では、「トヲク」、「ナヲ」など、第二音節目のものや、体言的なものに「ヲ」の表記が見られることを指摘されている。

「延五記」の場合も、「ナヲ」「トヲ」の語音を持つものが多く認められるので、これらでは、語音・語形の関係から、個別的に「ヲ」の表記をとっているものと思われる。

三 八行転呼に関する注

以上のような、歌部分・注の部分における表記上の問題の他に、

表Ⅲ 『延五記』に見えるハ行転呼に関する読み方の注

(原則として巻の順にとりあげている)

は→ハ	表出箇所	注 〔『延五記』より引用〕
在原 ^ハ 在原 ^ハ 元方 かにはさくら しはつ山ふり	仮 1—14 1—1—3 1—3—7—427 21—7—12—1073	ワラニ非ス ワラトハヨマス（ハラと声点がある） カンハサクラトハネテヨムヘキラカニハトヨメリ
は→ワ たちはきの陳 たちはき いとははれて はに しはにや たはるゝ 紅葉は 君はも こひは いましはと なくはこそ さかりはも 霜のふりはも	2—14—6—85 18—14—8—966 15—4—13—753 16—19—6—862 19—13—8—1003 19—25—8—1017 5—32—10—304 11—9—11—478 13—22—8—653 15—11—3—773 15—22—8—793 17—18—12—891 21—5—13—1072	帯刀也 人ノイトフ事ライハントテイトハレテソヘテヨメリ 母也 此哥紅葉ハトヨムヘカラス
ひ→ヒ アフヒ草 ^非 ちりひち たうひける	1—5—14—433 12—19—11—589	物ノ玉ヒケル也

『延五記』では、歌のよみ方に関する注があり、これにはハ行転呼に関するものも見られる。これらを表Ⅲに簡略にまとめて取りあげたが、『延五記』の注では、歌の意味・解釈の上から読み方を指定するものや、ヨミクセとするもの、また、清濁にかかわるものなど複雑な問題がある。多くは、ハ行転呼音をカタカナで示しているの、この注記も語音を考える手がかりになる。

例えば、「母」について、延五記では、「はに母也」（十六—19—6）と注記している。

「母」の語音の変遷については、亀井孝氏が、「ハワからハハへ」の論文⁽¹⁴⁾の中で、「後奈良院御撰何曾」の「母」には二度あへども父には一

	そこひなき	十四—23—2・722	
ふーウ	はふらさし	十九—51—8・1064	シカリトテ心ヲハ放 ^ハ 崎 ^セ セント也
へーエ	山へかへるな 門させりてへ	三—12—3・151 十八—19—6・975	此へノ字コノミヨムヘカラスト有
ほーオ	あほのつねみ おほなほひ	十—20—4・458 二十一—1—14・1069	
ほーラ	そほちつム ソホチ ソホチ しほらさらまし なほいこ いかほのぬま 山田のそほつ	十一—1—8 十三—15—12 十二—15—1・576 十五—27—10・807 十九—7—14・1003 十九—30—11・1027	シホルナレトモヨムクセニシヲルトヨメリ

と、

度もあはず」を「くちびる」と解く時、十五世紀の人々はハワと発音していても、「は」の発音が唇音Faの反覆であると感じていたとされ、江戸時代にはいってから、「ハハ」の語形が成立したの、この「同音反覆の語形成に対する記憶の伝承」によることを、「父」の語との対応関係、派生語の関係など、キリシタン資料他諸文献の例証をもって説明しておられる。そして、室町期の日常においては、ハワとハハとがほとんどえらぶところなく使われ、ハハの形は、ハワよりも、やわらかい感じの、俗なかたちではなかったかと述べられている。

- 一、歌部分、注の部分、ともに助詞については正表記が守られている。(注の部分には一例、「ハ」を「ワ」とする誤用例が見られた。注5参照)
- 二、歌部分、注の部分ともに、ハ行動詞の活用語尾にはほとんど誤用はない。
- 三、歌部分の表記では、定家仮名遣によるものが多く見られた。注の部分の表記にも、定家仮名遣や歌部分の表記にならったものが見られた。

『延五記』の場合、連続符が、ハ行転呼音にかかわらず用いられているので、「は」と表記されていても、「ハワ」と読むことは可能ではなくである。それを、「ワ」の音で読むことを指定し、「母也」と注記しているのは、亀井氏が指摘されるように、当時、俗にハハの語形があったことが想像される。

以上、歌の部分、注の部分における、ハ行転呼音の表記に関してまとめる

四、注の部分では、全般的に語中尾の「*ua・i・u・ue・uo*」の音を、「*ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ*」と表記する傾向が認められた。

五、漢字の振り仮名の部分や、名詞形のものなどに、表音的な表記が認められ、「ヒ」を「イ」、「フ」を「ウ」、「ヘ」を「エ」、「ホ」を「ヲ」とするものが見られた。

六、注の部分の表記において、「ホ」には、「ヲ」が対応し「オ」はかわらない。また、この時アクセントにはかわらない。

七、ア・ハ・ヤ・ワ行下二段動詞の混用が認められた。また、「用ウ」においてワ行上・上二動詞の混用が見られた。

以上、『延五記』におけるハ行転呼の問題を中心に扱ったが、これによって中世歌学書における表記の一面を見ることができた。

中世以後、特に歌道においては、定家仮名遣が權威あるものとして尊重されており、『延五記』においても、歌部分の表記には、定家仮名遣のものがかなり認められる。これは、古典筆写に際して、特に古今伝授という歌道の特殊な事情から、写本に忠実であったためである。その顕著な例として、『延五記』巻二七番の注に

そうく法し 承均 (二一四一六)

此均ノ字ハイハレス 均ノ字ニテ可有也然昔ヨリ書アヤマリテヤ侍ラン 其ヲ代々ノ宗匠ノナラサスシテ其マ、書ル事也 是ニテヨキ事ヲモアシキ事ヲモ代々相伝ノ如アラタメス伝ヨト云証拠ニ此均ノ字ヲ以テキテトセリとある部分に見ることができる。

これに対して、注の部分の表記では、歌の部分と共通して見られる語については、定家仮名遣が認められるが、全般的に語中尾

のワ行音を、ハ行のかなで表記する傾向が認められ、表音的なワ行のかなの表記も見られた。

ここに、歌部分と注の部分の表記に対する意識の違いを認めることができる。そしてこれは、古今集の時代から『延五記』に至る時間的へだたりに生じた、音韻・表記の問題として、また、室町時代における定家仮名遣の問題として大変興味深い事柄である。

この意味で、『延五記』は古今伝授の聞書全古今集注釈書としてだけでなく、国語学的、特に音韻・表記に関する研究の上でも、価値ある貴重な資料と認めうるものである。

注(1) 井上宗雄「堯孝・堯惠門流の著作類について」(『ぐんしよ』

第一号)全「中世歌壇史の研究 室町前期」『同 室町後期』

(2) 『中世歌壇史の研究 室町後期』81頁。

(3) 赤羽淑他翻刻『古今私秘聞』ノートルダム清心女子大学

古典叢書刊行会。

(4) 52年末に刊行予定、秋永一枝・田辺佳代翻刻『古今和歌集

延五記』。ここで5ページというのは、原本での見開き(一

面十四行書)5ページにあたる。

(5) 助詞「ハ」を「ワ」とするものが、注の部分に一例みられた。

行末ワコトモ知ス (四一九一六)

(6) 馬淵和夫「平安かなづかい」について「佐伯梅友博士古

稀記念国語学論集。

(7) 前掲論文437頁。

(8) 山内育男「かなづかいの歴史」講座国語史2『音韻史・

文字史』第七章

衆生ノ・ハカライニ・アラス(6オ)

釈迦如来ノ・御ツカイトシテ (45ウ)

五逆ノ・ツミヒトラ・キライ (4ウー5オ)

〔親鸞のかなの用法〕和語表記のかなの用法 575 べ「イ」
「ヒ」「キ」

(9) 湯沢幸吉郎『室町時代言語の研究』60 べ

(10) 『日本国語大辞典』アクセント史の金田一春彦先生原稿及び、秋永一枝先生アクセントカードを見せて頂いた。他に『古今和歌集声点本の研究』(前掲)、金田一春彦『四座講式の研究』『補忘記』(貞享版)にあたった。

(11) 「ナヲ」のアクセントは、古今集でも、平上(願照片仮名本・伏見宮家本・訓点抄)とある。但し、秋永一枝先生はこの音価を○●と推定されている。

(12) 「平安かなづかい」について 442 べ。

(13) 霜のふりはも (二十一 5—13・1072) の注には、

「次ニ此霜ノフリハニ一説アリ其ハ霜ノフリ葉也」(中略) 此水茎ノ哥ニ限リテハ霜ノフリハモトヨミテフリサマハト云方ヲ用侍リ」とある。

(14) かめいたかし「ハワからハハへ」『言語文化』第四号。

(15) 『延五記』の注の部分における連読符の用法でハ行音を含

む場合については

。ハ行四段動詞未然形十接続助詞バ

思ハ、・チカハ、

。「ハ」十係助詞「ハ」

コトノハ、

。係助詞「ハ」十「ハ」

夢ハ、カナキ・心ハ、ヤク(早く)

。清濁

ハ、カラス(憚る)・思ハ、ヤ

などの用例がある。

(16) これを数値で示すと次のようになる。ここでは、助詞を

除いた語中のハ行のかなの表記で、歴史的仮名遣をもとにして、正表記のものの総数、本来ワ行であるものをハ行のかんで表記した誤表記の総数、また、ハ行のかんであるべきものを、ワ行のかんで表記した誤表記の総数をあげ、正表記・誤表記あわせて語中のワ行音をハ行のかんで表記した総数に対して、ワ行のかんで表記したものの割合を算出した。

語中	語中	語中	語中	語中	語中	ハ行のかな		誤	割合
						正	誤		
語中 ya	語中 u	語中 ie	語中 yo	語中 i	語中 e	526	265	35	3.3%
ハ→ワ	ヒ→イ	ヒ→キ	フ→ウ	ヘ→エ	ヘ→エ	19	16	7	2.9%
誤	誤								
ハ行のかな表記	ハ行のかな表記	ハ行のかな表記	ハ行のかな表記	ハ行のかな表記	ハ行のかな表記	29	1	6	1.2%
に対するワ行の	に対するワ行の	に対するワ行の	に対するワ行の	に対するワ行の	に対するワ行の	38.1%			
かな表記の割合	かな表記の割合	かな表記の割合	かな表記の割合	かな表記の割合	かな表記の割合				

このように語中のワ行の音をハ行で表記するものが多く、表音的にワ行のかんで表記したものは大変少ない。しかし、ホをワとしたものは、割に多く、語中にホのかんで表記した例が少ないので、その割合が他とくらべると大きくなっていることが注目される。

〔付記〕

この調査にあたって、秋永一枝先生のお手元の『延五記』写真複製をお借りした。ここにお礼申し上げたい。

また、この報告は、卒業論文(昭和52年3月)の一部に手を加えたものである。その際、諸先生方から多くの御教示を頂いた。このこともあわせて、ここにお礼申し上げます。